武道を思索する

第21回

品格と威厳の難しさ

東京大学教授　大石　和欣

先日、日本18世紀学会の年次大会に出席した。出席したといっても2020年からはオンラインでの開催となっているので、パソコンの前に座って研究発表やシンポジウムをじっと聴いているだけである。対面での参加に比べると味気ないことこの上ない。

それでも内容的に興味深い話には引き込まれる。日本やアジア、ヨーロッパなど特定の地域に偏らず、また専門領域も横断して18世紀を考えるのが学会の趣旨だが、今回質疑応答を含めて面白かったのが、フランスの哲学者モンテスキューの「気品（politesse）」について論じた研究発表であった。17世紀以来、「行儀作法（civilité）」と並んで社交を含む社会生活上の美徳として讃えられていた「気品」について、モンテスキューは必ずしも肯定的な見解を持っていなかったというのが趣旨だった。質疑応答を通して、モンテスキューの主著『法の精神』の解釈にまつわる問題から始まり、"politesse"の定義や訳語にいたるまで議論が尽くされた。

「品格」は定義できないのか

冒頭の議論に関して言えば、通説では、18世紀になると多くの作法書が出回ったために「行儀作法」は上流階級の特権的美徳ではなくなってしまったのに対し、「上品さ」は依然として富や教養、地位ある人々にとっての専売特許であり続けたということになるが、それは必ずしも美徳とは捉えきれない側面もあるようだ。

フランスは専門外だが、イギリスのことを考えると当然のように思われる。英語で言う"politeness"もまた、18世紀において、立ち居振る舞いから服装、話術にいたるまで、マナーや品の良さ、育ちの良さ、上品さ一般を指す言葉で、日本語に訳しにくい。しかし、イギリスでは重商主義政策もあって経済の活性化と市民社会の発達が進み、貴族・上流階級に限定された美徳というよりも、富とともに教養と作法を身につけた中流階級の美徳として台頭したものである。貴族的な「優雅さ」とは異なり、社会的実力を伴っていることが含意されているが、その一方でときに内面的道徳性を伴わない表層的な上品さのみに焦点が当たる可能性もあった。とはいえ、特定の社会階級と結びつきやすい美徳である点は変わらない。

「気品」や「上品さ」と表現すると武道の美徳として語りにくいが、「品位」や「品格」となると常に武道において求められるものである。それらは社会階級と連動しているわけでもないと思う。

では何をもって「品位」や「品格」を構成しているかとなるとなかなか説明は難しい。武道に関わる言説では「品位」や「品格」を決まり文句のように用いることはあっても、それが何によって成立しているかを含めて定義をすることはあまりない。武道家の品位や品格は神秘化あるいは神話化されがちなのだ。坂東眞理子氏の『女性の品格』や藤原正彦氏の『国家の品格』といった本がベストセラーになった時でも、武道における「品格」は社会的に話題とされなかった。それは当然のものであり、あえて考え直すこともないということなのだろう。「品格」は武道家たちが暗黙の了解として共有している身体知・感覚知のようなもので、言語化できない美徳という認識があるのであろう。

その曖昧さが一般社会の目に露呈してしまった好例がある。大相撲の朝青龍関が引退会見を開いた2010年2月4日から数日後に放送されたNHK番組「追跡！A to Z」でのことだ。「朝青龍　引退の舞台裏～〝強さ〟と〝品格〟のはざまで～」と題された番組で、元横綱北乃富士や当時日本相撲協会生活指導部特別委員会の委員を務めていたやくみつる氏は、暴行事件を引き起こした朝青龍関が横綱としての品格に欠けると指摘し

た。ところが、何をもって品格かという問題については、可視化したり、計測したり、説明したりできないと答えをぼかさざるを得なかった。一部の視聴者からは、定義できない「品格」を基準に引退を当然視していいのかという疑問も出たようだ。

嘉納治五郎が掲げる「品格」

そんな神秘性が常態化している武道家の「品格」について、講道館創設者の嘉納治五郎が正面切って定義した議論は再度見直す価値があると思う。雑誌『柔道』に大正6（1917）年に寄稿した文章において、柔道家の品格は「行儀作法」「生活ぶり」「交際ぶり」「仕事ぶり」「理想」の五つの側面から成り立っていると論じる。

嘉納治五郎（講道館提供）

行儀作法については、礼儀をわきまえているのはもちろんだが、「姿勢、身形、立居振舞等」が正しく、良いものであるかどうかが問題になるという。「服装」も整っていることが大切であるが、階級や資力は必ずしも関係ないとも付け加える。つまり高価な服を着ている必要はなく、清潔であり、折り目正しい着装であることが大切であり、何よりも着ているものを含めた身体のあり方に「品格」の根源があることになる。

生活については、お金を自分の体裁や外見のためではなく、自分の将来や子孫、国家社会のために費やすことで品格が生まれるという。資力が十分でないのに贅沢するのは恥であり、服や家が粗末でも、他人に迷惑をかけたり、失礼だったりしない堅実な生活こそ、いずれ実力の備わった豊かな生活につながると助言する。質素倹約の精神と言えよう。

嘉納は交際における言葉遣いも問題にする。思慮のない会話やみだりに人を批評したり、貶したりすることは、自分の品格も貶めると注意を喚起する。「人と交るには、第一言葉を慎まなければならぬ」と「慎み」を強調する。要するに他者への配慮が品格を構築することになる。

仕事においては上役に阿ることは自分の品格を傷つけることになると警告する。柔道についても、たとえ実力があったとしても「慎む」ことを称揚する。「みだりにこれを用いず義のためとかおのれの正当の権利を守るためとか必要の場合にはいつでも用いる事を躊躇しないという心構をもって自重していると、その人に品格は備ってくるのである」

その背後には、人間として高い理想を掲げ続けるべきであるという考え方がある。

人間一切の行動は理想から割出されるのであるから、いかなる理想を有っているかということは人にとっては大切な問題である。理想が低ければ行動もおのずからそれに彩られて低くなり、それが高ければ行動も高くなり、したがって品格に影響してくるのである。名誉を得ようとする人には、すべての行動は名誉から割出され、利益を目的とする人はその目的から割出して行動することになり、権力を欲するものはその行動もまたその影響を受ける次第である。それらの慾が人間を支配する時は、人間は自己本位となり、おのずから賤しくなるものである。人間は名誉利益権力以上の一層高き理想を懐いて、それから割出してきて行動することが願わしい。

（『柔道』第3巻第11号）

ごく当たり前のことを述べているようにも聞こえるし、それ以外にも「品格」を構成する要素を列挙することは可能であろう。しかし、これほど本質的な人間論として「品格」を定義し、かつ説得力を持って論じることができるのは、嘉納治五郎の柔道家として、さらには人間としての実力と実績に裏打ちされているからこそと言えよう。

武士道における「威厳」

冒頭に言及したモンテスキューの言う「気品」や神秘化されがちな武道の「品位」や「品格」を考えた時に、脳裏に浮かぶのが「威厳」という言葉である。意味は微妙に異なる。『日本国語大辞典』をひもとくと、「気品」が「芸術作品や人の容貌・身のこなしなどについて、どことなく感じられる上品な様子。けだかい品位」を意味し、「品格」が「物の性質のよしあしの程度」「身分や位・格式」「品位。気品」を意味するのに対して、「威厳」は「威光があって厳かなこと。近付きがたいほど堂々として立派であること。いかめしさ」という定義がなされてい

る。「厳か」「いかめしい」という言葉が入るように、「威厳」にはどこか儀式ばったり、仰々しかったりと、内面的な徳性よりも外見を問題視しているようなニュアンスが強く感じられてしまう。

ところが英語で考えようとすると、「品格」「品位」「威厳」のいずれも“dignity”（ディグニティ）という言葉にしかならないのではないかと思う。価値あるものや優れた人物を意味する中世フランス語源の単語である。他のものや人よりも抜きん出て優れている状態を示唆し、高い地位にある人や秀でた手腕や名誉ある人物に備わった美質や雰囲気を形容する言葉である。古くは称号として用いられていたこともあり、「身分や位・格式」という「品格」を構成する要素とも不可分である。

武道では「威厳」という概念を美徳として称揚することはあまり多くないが、新渡戸稲造が武士道における「名誉」を説明するときに「威厳（dignity）」を持ち出しているのは示唆的である。武士という格式ある社会的存在として、つまり「価値の高い人間」であるということが前提にあって「名誉」を重んじるという説明を提示する。

名誉の感覚には、自らが威厳ある、価値の高い人間であるという鮮明な意識がともなう。武士は身分にともなう責務と特権のもとに生まれ、それを大事にするように育てられるのであるから、武士の人格と名誉の感覚は切っても切れない関係にある。

（山本史郎訳『対訳　武士道』朝日新書）

ここで用いられた“dignity”を「品格」と訳しても間違いではないと思う。しかし、直後にある武士の「身分にともなう責務と特権」という言葉を考えると、社会的地位を強調しやすい「威厳」がより適切に感じられる。そもそも新渡戸があえて「威厳」を用いたのは、海外の読者に対して「武士道」を宣教しようという意図に沿って、西洋の騎士道や階級を含む社会構造に則してわかりやすい説明をしているためだと考えるべきだろう。「品格」には「名誉利益権力以上の一層高き理想」が必要だという嘉納治五郎の説明とは対照的である。

執事の威厳とは？

そんな「威厳」「品格」を問題視した文学作品が、ノーベル賞作家カズオ・イシグロの出世作である『日の名残り』である。第2次世界大戦までイギリスの貴族ダーリントン卿に執事として仕え、彼の死後は館を買い取ったアメリカ人外交官に仕える執事スティーヴンズが主人公である。彼が休暇を取り、かつて同僚だった女性に会いに行く道中の出来事と戦前の回想が混じり合って物語を構成している。

スティーヴンズは、「偉大なる」貴族に仕える執事の職務を禁欲的、自己犠牲的に遂行することで、自らも「偉大な」執事になり、“dignity”（品格・威厳）を備えることになると考えていた。しかし、過去を回想しながら旅を続ける過程で、それが思い込みであり、必ずしも正しくなかったことを認識していく。

かつてダーリントン卿は、第1次世界大戦の債務に苦しむ敗戦国ドイツに対してイギリスは宥和政策を講じるべきだと主張し、自らの館で講和会議を開催した。その際スティーヴンズは、父親が臨終の際にあるにもかかわらず、自分の感情を押し殺して会議を懸命に切り盛りしたことで、自分は執事としての「威厳」を獲得し、偉大な先達に仲間入りしたと考えていた。

しかしながら、ドイツ宥和策は結局のところナチスの横暴を許しただけであった。ダーリントン卿は、会議の場でもフランスの外交官からナチスに対する考えの甘さを「アマチュア」と罵られ、戦後になっても誹謗中傷を受け続け、失意のまま世を去る。スティーヴンズ自身も主人の指示に従ってユダヤ人のメイドを解雇した罪な経験を持つ。そんなダーリントン卿に偉大さや威厳という言葉は適切なのだろうか、その彼に唯々諾々と従っていたスティーヴンズにも執事の「品格」は認められるのだろうか、そもそも肉親の死を悲しむ感情を認めなかった人間に「威厳」はあるのかと小説は問いかける。

旅の道中で車が故障した際に立ち寄った居酒屋では、仕立ての良い服を着た立派な風采の紳士が現れたということで、村人たちにもてはやされる。「紳士」の美質は何だろうかと問いかけられた際に、スティーヴンズは即座に「威厳だ」と答える。ところがそれを聞いた村人の一人は、それはおかしいと歯に衣着せずに反論する。「品格は紳士だけのものではないぞ。品格はこのイギリスの男性であれ、女性であれ、懸命に努力すればだれでも手にすることができるものだ」。政治的にリベラルな立場を表明したものであるが、スティーヴンズが“dignity”を高い地位や階級に備わる美徳として考えていたのに対して、それは表層的なものでしかないと村人は批判したのである。むしろ人間の本質として考えるべきで、どんな人間であれ懸命に努力して生きれば品格は備わるものだというのである。

原文の“dignity”をあえて「威厳」と「品格」と訳し分けてみた。両者の考え方と意味がずれているからである。人間としての「品格」を論じるときには社会的地位や階級、富は問題にならない。スティーヴンズの禁欲さには武士道的美徳があるという学説もあるが、私はむしろ村人の主張する「品格」にこそ、嘉納治五郎が論じた武道家の「品格」と通じるものがあると考えている。そして「威厳」とは異なる「品格」という言葉を備えている日本語の言語文化と伝統の重さを感じてしまう。それは武道とも無縁ではないだろう。